

第一部 訪れる者

1

駐車場に車をのりいれると、係りのタカ坊がいつものようにキャップをふって挨拶をした。

「おはよう、ボス」

「おはよう」

返事をして、手をふりロックをせずに車を降りた。

メルセデス・四・五SL。

たとえ同色同種の車が駐車場から出ていっても、タカ坊は、それが誰の車かを見わけることができない。

開ける前の店の中は、まだ真新しく、ピカピカと輝いていた。澄んだ、冷んやりとした空気で満ちている。

自動ドアをくぐった時、一瞬店内の暗さにとまどった。今では、どんな曲がかかっても、まったく気にならない、ピアノ・ソロのB・G・Mが流れている。

「おはようございます」

チーフ・マネージャーの滝がオフィスで私を迎えた。

「おはよう。きのうはどうだった？」

滝はにやりと笑った。

「皆さん楽しめました。割れたグラスはどういたしましたしょう」

「いくつぐらい？」

「ショット・グラスが二つに、カクテル・グラスが三つです。ショット・グラスはボヘミアンですが……」

「サービスしておこう」

私は答えた。

「いずれ、彼らがまた東京からやってくるときに、グラス代ぐらいおとしていくさ」

「かしこまりました」

滝は頭を下げて、オフィスを立ち去った。

滝は四十歳で、早稲田の理工出身である。しかし、彼はコンピュータよりも、夜のレス・クラブを好んだ。三十二歳まで銀座で勤め、その後、生まれ故郷のこの街で、小さなスナックをやっていたのを、私が見つけ、三年前に開店させた、「プリアール」のチーフ・マネージャーにした。

が市でも最高級のレストラン・クラブになった現在まで、彼らは指一本触れてこない。無論、彼の給料は店では、私の次、シェフの有海とならぬ高い。

私が四年前に、この街に現われ、落ち着いた雰囲気のレストランを始めたいので協力してほしいと頼んだとき、俺も有海も難色を示した。

理由は簡単だった。

私が店の概要を話したとき、彼らは私の年齢と、そして決してわかったことのない資本の出所に不安を感じたのだ。

私はその年、三十四だった。遺産をのこしてくれた親がいるわけでも、私の手腕を見込んだ財界のパトロンがいるわけでもなかった。

「プリオール」は土地代から内装まで、あわせて、億単位の金がかかった。その市には、いままでもなかったタイプの店であり、しかも私は雰囲気の高級さで、料理の粗悪さをごまかすつもりでもなかった。

彼ら二人は、私が「プリオール」を開店するまで、大変な冒険に荷担したと思っていた。今は、思っていない。

オフィスのドアが開き、夕方までのキャッシュヤーをつとめる真由美がはいってきた。

「おはようございます、社長。きのうは大変なさわぎだったそうですね」

私は目で訊ねた。

「バーテンのジュンちゃん」

そういつて、真由美はウインクした。初めて彼女を見る者はその容姿にとまどう。

ほっそりとしていて背が高く、色白の顔はおどろくほど彫りがふかくて表情が豊かである。

「プリオール」を訪れる外国人の客が、彼女に母国語ではなしかけたことは一度ではない。

そんなとき、彼女は肩をすくめあやまる。自分が、その国の言葉をしゃべることができぬ意見を、彼女は英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語で相手に伝える。

それ以外の外国語はいっさいしゃべらない。彼女は純粹の日本人である。

「東京のテレビ屋さんたちだ。健次君に教えられて、きたらしい」

「あの子、がんばっていますね」

真由美は目をかがやかせた。竹田健次は、開店したてから一年、「プリオール」のウエイターをしていた。ウエイターは、食べてゆけないモデル業を補うアルバイトだったが、中央からきていた人間の目にとまり、来年の正月映画の準主役に、現在きまつている。

「君もいくか？」

私はいたずらっぽく訊ねた。真由美は即座に首をふった。彼女の年齢を正確には知らないが、二十一か二だ。今まで、幾度も芸能界にスカウトされた経験をもっている。

しかし、彼女はいいかない。この街と、「プリオール」が好きなのだ。

私のことを愛しているのではない。真由美には彼女をモデルにして絵を描きつづけている、画家の卵がいる。二人はいっしょに暮らしている。

「郵便です」

真由美は抱えていた、封筒の束をさしだした。彼女は午前十一時から三十分間、私の秘書もつとめる。

「ありがとう」

束を分類した。ドアが開き、ウェイターの一人が、コーヒーのカップがのったトレイをもつてきた。

「ああ、そうだ。昼休みに、タカ坊に私の車にガソリンをいれてきてくれるよう、頼んでくれないか」

「わかりました」

すばやく、私のコーヒーに適量の砂糖とミルクをいれた真由美が答えた。彼女の、私のコーヒーを作りたがる、この習慣だけには私は内心閉口している。

「タカ坊よろこぶわ。社長の車に夢中だから……」

私がコーヒーを口に運ぶと、彼女は続けた。

「社長は、お休みはいかがなさるんですか」

八月の十四・十五日。明日からの二日間、「プリアール」も休みになる。従業員は既に七月にも二日間の特別休暇をとっている。そのときは、ローテーションが組まれ、店そのものは休業していない。

「わからない。多分、家でレコードでもきくことになるだろう。この時期はどこもかしこもこむからね。君はどうする」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。